

空の剣

豊田 穰



空の剣

豊田

穰



空の剣

昭和四十六年八月一日第一刷
昭和四十六年九月十五日第二刷

著者 豊田穰

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

郵便番号 一〇二

東京都千代田区紀尾井町三

電話 東京二六五局一二一一

振替 東京七八七四三

印刷所 凸版印刷

製本所 加藤製本

定価 五八〇円

© 1971 Jo Toyoda
Printed in Japan

万一落丁・乱丁の場合
はお取替えいたします。

目次

空の剣

5

荒野の人

63

腕立て兵曹

111

空港へ

153

ラバウル観音

203

海軍衛兵司令日記

247

裝幀
養老正也

空
の
剣

空
の
剣

ニューブリテン島は、日本列島やフィリピン群島をふくむ環太平洋造山帯の南西部に属する弧状列島の一部で、ニューアイルランド島とニューギニア島の間位に位置する火山島である。弓形をなす島の北東部には、かつて巨大な火山があったと推定され、それが陥没し、火口のカルデラが海とつながったのが、ブランシュ湾（ラバウル湾）である。

ラバウルはこの湾の奥にある港町で、湾の北側には、海拔二千二百八十六メートルの活火山フアテル（花吹山）があり、南岸には白い火山灰に蔽われた小火山フルカンがある。

南緯五度のラバウルは常夏と呼ばれるにふさわしい暑熱と、朝夕のスコールに恵まれた町である。太平洋戦争の初期、ラバウルの周辺には三つの飛行場があった。ラバウルの町のある位置はなだらかな斜面であるが、その南東には、かつての火口壁が二百メートル近い絶壁となって残り、

崖の上の台地に、日本海軍が造ったブナカナウの飛行場がある。昭和十八年三月下旬のある日、ブナカナウの飛行場に朝のスコールが訪れた直後、ニッパヤシの葉に蔽われた搭乗員待機室で、舞いに似た奇妙な手ぶりをみせている男がいた。

——いかなる手を打つか、いかなる手を……——

彼は口のなかで、そのようなことばをつぶやいていた。——いかにして、グラマン戦闘機隊の一番機を撃墜するか……。仲谷上等飛行兵曹の思いはそれだった。

四本の指が癒着した左掌をグラマン機、右掌を自分の零戦になぞらえて、前上方攻撃、後下方攻撃の襲撃方法を繰り返しているうちに、

「結局、見張りだな」

仲谷の唇をついてことばが出た。アメリカのグラマン隊にやられるときは、奇襲が多い。雲の上から、あるいは翼下の断雲のなかから、突如として襲ってきて、零戦隊の隊長機を倒すのである。そのとき、二番機である仲谷機のかたわらをすりぬけてゆく、ダークグリーン色のグラマン隊一番機が仲谷のお目当てなのである。

仲谷はこのグラマン機に三つ星という仇名をつけていた。初めて見参したとき、胴体の横に赤い星を三つつけていたからである。間もなく、それは四つになり、五つにふえた。日本機を撃墜するたびに星がふえるので、あの星がふえないうちに、ひねらなければいけない。それにしても

艦爆（艦上爆撃機）隊に行かないで、制空隊の零戦にかかって来るのは、よほど腕に自信があるのだろう。

これに対抗するには、見張りしかない。前後左右はもちろん、上、下方を十分に、

「見張るのだ！」

そう声に出したとき、

「違うな」

横から声がかかった。

地上指揮官代理の岩堀中尉にいった。岩堀は丙練（一般水兵から搭乗員を志願したもの）出身のベテランで、仲谷と同じく、六月五日のミッドウェー海戦で負傷してから、地上勤務専門になっていた。仲谷は両頬に火傷を負い、左掌の指が^{おやゆび}拇指を除いて四本癒着したのであるが、岩堀は敵の高角砲弾の破片を受けて、左の足首を砕かれ、着艦後、切断したため、操縦不能になったのである。支那事変当時、南昌空襲のころから、名パイロットの名の高い岩堀の引退を惜しむ声は多かった。岩堀は空母部隊から地上部隊に回され、現在はブナカナウ飛行場駐屯の二〇八戦闘航空隊の地上指揮官代理である。

「仲やん、それは違うぞ」

岩堀は続けた。

「ええか、見張りはむろん大切やが、それだけでは空戦には勝てん……」

「それじゃなんですか。ひねりこみですか？」

ひねりこみというのは、敵機がこちらの後尾につこうとしたとき、零戦の性能を利用した急激な垂直旋回で敵をかわし、逆にそのうしろに着く戦法である。

「うんにゃ、それでもないな」

岩堀はラバウルに来てから伸ばし始めたあごひげに手をやった。——分隊長は近ごろ支那の仙人に似てきたな、あのような顔の絵を、佐世保の下士官兵集会所で見たことがあるような気がする——

「じゃ、なんですか」

「つまりやな……」

岩堀はひげをひっぱりながら答えた。

「運やな」

「運？……」

「あきらめと言ってもよろしい」

「しかし、それは……。岩堀分隊長は、上海のクングの飛行場にいたときから、空戦は力と力の勝負だ。それには眼だ。まず、見張りだ。見張りで敵を先に発見する。そのあとはひねりこみで

敵のうしろにつく。あとは照準を合わせ、引き金をひく。すれば自動的に相手の機は落ちる。こ
ういっとられたじゃないですか」

「うむ、あんときはそう思ってた。あんときはな……」

「今はどうなんです？」

「わしは考えた。ミッドウエーで飛竜だけが残り、最終攻撃で、戦闘機六機で十機の艦攻（艦上
攻撃機）を掩護して行ったな、あんときだ。ヨークタウンを護る敵輪型陣の上にさしかかったと
き、中隊長機が高角砲弾の直撃を受けて炸裂したやろ。まるで照明用のマグネシウム弾のよう
に、機体が四方八方に飛び散った。わしは森本大尉の体が宙にほうり出されるのを見た。気がつ
くと、左脚が利かない。破片が足首の骨に食いこんでいたんじゃ。そのとき、わしは考えた。戦
争などというものは、しょせん運じゃ、ツキじゃ。あの日、赤城、加賀、蒼竜が一撃でやられた
じゃろう。五分間、発進が遅れたからという。わしはヨークタウンの上空で、片脚で空戦をやり
ながら、逃げることを考えとった。わしの戦闘機乗りとしての寿命は終わった。あとは何とかし
て生き延びることじゃ。わしは、敵のグラマンを避けながら、マフラーで左脚の太ももをしっか
りしばって、出血を止めた。フットバー（足踏^{かん}）が利かないので、スティック（操縦^{かん}）だけで操
縦して母艦に帰った。ちょうど岸村の逆やな。岸村は左のエルロン（補助翼）をもぎとられ、フッ
トバーだけで帰って来た。片翼帰還といって、大きく新聞に出たが……。わしは、エルロンだけ

を使って飛竜に着艦し、ただちに病室に收容されたが、足首を切断されたとき、やはり考えた。

人間はおのれの分を知らにゃあいかん。人間は自分だけが戦つと思つとるが、実は自分よりはるかに大きなものがうしろにいて、自分を動かしかとるんじや。その力にはだれも勝てん……」

「それが運ですか」

「左様。そこであきらめることが肝心となる。あきらめといつても、はじめから投げ出すことではない。明らかにものの本体を見きわめて、おのれの至らなさを知ることやな……」

——分隊長は近ごろ、坊主のいうようなことをいうようになった。三千時間飛んで、百五十機も落とすと、そういう心境になるものだろうか——

そこへ、航空隊司令の大原大佐が現われた。

「おい、何をまたお説教しとるんじや。岩堀は足をやられてから、急にまっこうくさくなったのう。それよりも、岸村をもらうことにしたぞ。片翼帰還……、こいつなら、新田のかわりにはもつてこいだ」

「そうですか、岸村兵曹長が来られますか」

仲谷はやけどでひきつった頬をほころばせた。岸村には上海で教えてもらったこともあるし、岩堀、岸村、仲谷の編隊は海軍最強という評判をとったこともある。しかし、当の岩堀は、うかぬ顔をしていた。

「あまり、当てにはなりやせん。鹿屋かのやで会ったとき、岸村は、ばかに頭かぶが高くなっていた。新聞で騒がれすぎて、英雄になってしまおうたんじゃ。人間、心の奢おごることも恐ろしい。目前の敵よりも、おのれの心のなかに巢喰うう敵、これがおのれみずからを滅ぼす」

「何を言っとるか、岩堀。自分が飛べんからと言って、そう悲観ひかん的なことを言うな。おれは少しぐらい生意気でも、力のある奴が好きだ。岸村ならアメうまのグラ公こうをどしどし落としてくれるぞ。何しろ、片翼帰還の勇士だからな」

「ところで司令、飛行服をつけて、また飛んでおられるんですか。気をつけて下さいよ。ロッキードの二つ胴どう(P38)は、ラバウルの上空へもやって来ますからね」

「なに、こちらも双発の夜戦(夜間用戦闘機)月光だ。スピードなら負けやせん」

大原司令は空を仰いだ後、

「おい、岩堀、お前にもう一度飛べるようにしてやるぞ」

「本当ですか、司令！」

叫んだのは仲谷の方で、岩堀の方は気のなさそうな顔で、右膝の上にあげた左足首の義足の付け目をなでていた。

「おれはウソはいわん。いいか、月光に斜銃ななめじゅうをつけるんだ」

「ななめじゅう？」

「今、試飛行をやっている月光の操縦席のうしろに、左斜前上方三十五度の方向を向いた二十ミリ機銃二挺をつける。これでB17の下にもぐりこんで、斜下から撃ち上げるんだ。こいつは効果があるぞ。月光なら方向舵も水平舵も連動式のハンドルだから、脚は義足でもよろしい。どうだ、岩堀にもってこいの飛行機じゃろうが……」

「そうですね、一度のせてもらいましゅうか」

岩堀の瞳にようやく光がともり、ゆっくり立ち上がると、落下傘バンドのつるしてある柵の方に左足をひきずりながら歩き始めた。

「いよいよ、ツキがまわってきましたね、分隊長！」

「まだわかりません」

背中で返事をする、岩堀は落下傘のバンドに手をかけ、一度ふりむくと空を仰いだ。

二

「本二〇八空は、戦闘機二個中隊をもって、艦爆二個中隊を掩護する。艦爆十八機はブーゲンビル島ブイン基地より離陸し、ガダルカナル島の飛行場施設を爆撃する。ラバウルよりブインまでの距離四百キロ。従って当直掩護戦闘機隊は明朝〇四〇〇離陸、〇五一五、ブイン上空において、